

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

ボランティアを通じ、 楽しく自然に“人と繋がる”

学内や地域の人との交流から、
多くのことを吸収したい

●ボランティアセンター学生スタッフ 社会学部2年次生
梅田 麻菜 さん

2005年、関西大学に「ボランティアセンター学生スタッフ」が発足。その目的は、関西大学の学生がボランティア活動に参加するためのきっかけ作り。現在、センターには1~2年次生を主体とする14名の学生スタッフが在籍し、職員とともにセンターの運営事業に携わりながら、『淀川掃除』や芥川の『ミズヒマワリ駆除』、キャンパスの『福祉MAP』制作…と、精力的に活動を行っている。代表の梅田麻菜さんに、その活動内容や想いを聞いた。



梅田 麻菜—うめだ まな
■1989(平成元)年 熊本県生まれ。熊本県立天草高校卒業。社会学部2年次生、ボランティアセンター学生スタッフ代表。

ボランティアセンター学生スタッフは、毎月第1日曜日に『淀川掃除に学ぶ会』主催の淀川掃除活動に参加している。参加開始から今年8月で丸2年。当初は学生スタッフと一般学生合わせて十数名で行っていたこの活動も、現在では多い時で60名も集まる伝統行事へと成長した。

「2年も継続しているので、もう綺麗になってもいいかなと思うのですが、毎回いっぱい出てくるんですよ」受け持つ区域は



ミズヒマワリを駆除する学生スタッフたち

100m程度だが、約2時間の作業でトラック1杯分、ゴミ袋40袋分ものゴミが集まる。小さなゴミだけでなく、タイヤやバイクなどの大型ゴミまであり、作業は一筋縄ではいかない。一見大変そうに見えるこの淀川掃除は、学生に人気があり、うまく浸透している。その理由とは聞くと「淀川という身近な場所、作業は午前中だけという気軽さ、そして他の参加者と会話し、楽しみながらできるということ」と言う。梅田さん自身、一緒に清掃した学生とは次にキャンパスで会ったら挨拶するようになり、どんどん知り合いが増えている。「淀川掃除が、学生同士の交流に繋がっていることが何より嬉しい。作業中の雰囲気もとてもよくて、今となっては止められない活動です」雰囲気のよさはボランティアセンター内にも通じるものであり、梅田さんたち学生スタッフの気遣いや行動の表れでもあるだろう。

学生スタッフの活動は幅広い。2008年冬期からは大阪府茨木土木事務所、高槻市とNPO法人芥川倶楽部など市民団体が取り組んでいる芥川の『ミズヒマワリ駆除活動』への参加を決めた。特定外来生物であるミズヒマワリは、放っておくと川一面に繁殖して生態系を崩してしまう。地域の人と合わせて約40名が、川に入り作業を行った。「力も使うし危険もあるけれど、地域との交流ができてよかった。学生スタッフは関西大学にボランティアを広めるためにあるけれど、一般の人にもこんなボランティアがあることを知ってもらえたら」

先輩のなかには災害ボランティアに行った人もおり、刺激を受けることも多い。「私も、受け身ではなく自主的に参加しようという意識が芽生えてきました」今年、学生スタッフより「防災について調べるために現地に行きたい」という声があがった。梅田さんもそのひとりであり、夏休みに新潟と神戸、大阪の防災施設に話を聞きに行った。「新潟では中越沖地震の話を知り、映像も見ました。当時の被災地の日常生活や恐怖…、ニュース等で知るよりもずっとリアルに感じました。この経験は、学園祭の防災キャンペーンに活かすことができました」と

様々な活動を率先して行う梅田さんも、入学当初は知り合いがいなかったと言う。「私は人と接するのが大好き。授業を受けるためだけに大学に通うのではなく、多くの人と交わることができ、お互いにとってプラスと思える場は？と考え、学生スタッフになりました。『ボランティアしている』という意識はあまりなく、『やっていて楽しい』んです」最後に、梅田さんにとってボランティアとは何かと聞いた。「つながりやきっかけ、気付きを与えてくれる存在。大学生活の4年間、ボランティアを通じて多くのことを吸収したいと思っています」

課題のなかに目標を見だし、 “視聴者目線”の番組を作る

祭りの中継レポートに魅了され、
アナウンサーの道へ！

●朝日放送アナウンサー
橋詰 優子 さん —社会学部 1997年卒業—

ウィークデーの夕方、元気な笑顔とわかりやすい語り口で日々の最新情報を紹介する橋詰優子さん。ニュース番組のキャスターを務める一方で、アジアを紹介するトーク番組なども担当し、幅広く活躍している。アナウンサーとして心掛けていることは、「視聴者と同じ目線にいること、普通の人間であること、心身ともに健康であること」身近にある課題から、常に目標を見つけ邁進する橋詰さんの大学時代や仕事について話を伺った。



朝日放送「NEWSゆう+」での橋詰さん(左)

「お祭りが大好きで、なんでも“*いっちょかみ”するタイプなんです」大学2年生の冬、十日戎(通称:えべっさん)の福娘に選ばれて祭りに参加。その際、各局の女性アナウンサーが中継レポートしている姿を目にし、「お祭りを楽しんで、それを伝えるなんて、めっちゃおもしろそうなお仕事！」と盛り上がり、アナウンサーになることを決意した。即行動を開始した橋詰さんは、学生リポーターのアルバイトに応募し、現場でリポーター業を学んでいく。…そして、「アナウンサーになれますように」と、えべっさんをお願いしたあの日からわずか2年後、橋詰さんは朝日放送のアナウンサーとなり、自らが十日戎の中継を担当することとなる。「あのとき見ていたアナウンサーの側に今、私が立っている！って、夢が叶い本当に嬉しかったです」

採用された理由の心当たりはと問うと、「実は朝日放送の面接ではあまり手応えがなく、駄目なのかなと思っていた」とのこと。しかし、入社後、関大に入学した際に感じたように「自分と波長が合っている」ことに気付いたという。「背伸びせず、大阪弁でしゃべる私をありのままの姿で受け入れてくれたのが朝日放送だったんです」関大と共通する自由な気質をもつ社風が、橋詰さんをより生き生きとさせているようだ。

橋詰さんは常に、与えられた課題のなから目標を見つける。入社して最初に語った夢は大阪オリンピックの中継レポートだった。残念ながら大阪でのオリンピック開催は実現せず、夢破れたちようどそのときに話を貰ったのが、中国をテーマにしたラジオ番組の担当。行ったこともない中国、話せない中国語…。「どうして私に？と、とまどいましたが、2008年に北京でオリ



橋詰 優子—はしづめ ゆうこ
■大阪府出身。大阪府立豊中高校卒業。1997年朝日放送入社。テレビ報道情報番組「NEWSゆう+」(月~金曜 午後4:50放送)やラジオ番組「橋詰優子のチャイナ!チャイナ!」(旧「橋詰優子のおはようチャイナ」)などの顔として活躍中。旅行や写真、中国楽器“二胡”、茶道など幅広い趣味をもつ。

ンピックが開催されることに気づき、目標を切り替えました」それからはオリンピックに向けて中国語を猛勉強。夢を実現するため、コツコツと企画を練り、北京オリンピックではテレビ、ラジオともに現地からレポートを入れることができた。一方、ゼロから始めたラジオ番組では、何も知らないからこそ可能な、視聴者と同じ「一般的目線からの中国」を紹介。リスナーからの評判も上々で、現在も続く息の長い番組へと成長した。

そんな関大人らしい“考動力”をもつ橋詰さんにも、失敗はあるという。そこからの復活法を聞くと「気にしないこと。私は鈍感な方なので(笑)、周りが自分のことをどう見ているか、どう思っているかということにはあまり気にせず乗り切ってきました」常に前向きな姿勢であり続けるコツとも言えそうだ。

就職難と言われる今の時代、後輩たちには「ただでさえ短い4年間なのに就職活動の時期も早まり、可哀そうだなと思います。でも、だからこそ、やりたいなと思ったことは恐れず、ためらわず、すぐに行動に移して欲しい。迷っている時間があったくないです。学生時代というのは、心身ともにとっても柔軟な状況にあると思います。関大という環境は、個性豊かな人が周囲にいっぱいいて、刺激もすごいはず。その恵まれた環境のなかで、少しでも興味を持ったことは、すぐに実践して欲しいですね」

*いっちょかみ…大阪弁で、好奇心旺盛で何事にも参加したい人の意。

